

サンダル履きまま旅 6

◇フィリピン・セブ島では英語で話そう◇

寺井融

Terai Toru

マニラに土産持参の初老日本人
ジャピーノと呼ばれる混血児

隣の席の客から、声をかけられた。

「どちらに、行かれるんですか」

どちらに、と言われたって、飛行機の中である。決まっているではないか。

怪訝な顔をしていると、その初老の男性が「八王子に住む板金工で、六十歳です。二ヶ月に一度のペースでね、マニラに来ているんです。来ないよね、彼女から、パパ、淋しいと、電話がかかってくるもので」と語る。マニラのどの町に行くのかと聞いていたのだ。

「いや、観光ですから」と答える。

「パパで、知り合ったんですよ。子供が二人いますね」

「あなたの？」

「いえ、彼女の子です。私は独身です」

柿、リンゴ、オモチャ、お菓子と、山のように土産を持ち込んでいた。彼女宅を訪ねると、両親や子供たちも喜んでくれるという。「パパが、何人もいるかも」と思ったが、その言葉は飲み込んだ。還暦氏の生きがいや、批判する気になれなかったからである。

フィリピンと日本との間には、男と女にまつわる話が多い。

戦時中、日本の軍人との間に生まれた子供たちの認知問題がある。最近では、日本の農村への嫁



駄菓子屋に子供たちがたむろ

入りもある。逆に、日本公演にやってきたフィリピン・バンドを追っかけて、日本女性が渡ったケースもある。夫の働き口がないので、苦労しているともきく。

ちなみに、フィリピン人と日本人の間に生まれた混血は、ジャピーノと呼ばれる。日本に約六万人（二〇〇三年統計）。フィリピンには、それ以上いるのではないかといわれている。

ロングステイで人気のセブ島 軒連ねる高級リゾートホテル

この春、セブ島とマニラに行ってきた。セブはリゾート地である。直行便に乗ると、新婚旅行のカップルや女の子のグループがいて、マニラより明るい感じがした。今回は、伴侶と一緒にの旅である。気の進まない彼女を「ロングステイの適地だから、下見に行こう」と連れ出した。ロングステイというのは、日本に生活拠点を置きながら、海外に長めに滞在する旅を指す。近年、「年金で暮らせる東南アジア」として、フィリピンも、人氣地の一つだ。

セブ本島には、二つの橋でつながるマクタン島がある。国際飛行場があり、海岸沿いには、シャグリラやヒルトンといった、高級リゾートホテルが、軒を連ねている。

そこらを避け、本島に渡り、州都セブシテイの中心部にある、ウオーターフロントセブシテイホテル（四つ星）に宿泊した。「巨大な白亜の神殿」と、パンフレットに書かれている、客室が五百以上ある大ホテルである。

ホテル玄関に麻薬犬が出迎え カジノには普段着のオジサン

まず、玄関で驚かされた。ガードマンと麻薬犬が迎えてくれたのだ。カジノが併設されているか

らと思ったが、後に訪れたマニラの主要ホテルも同様であった。どうやらフィリピン・スタイルらしい。

その24時間営業のカジノだが、バカラもルーレットもあり、ビンゴもやっていて、もちろんスロットマシンもあった。内装も、それなりにきらびやかで、従業員も黒服で決めている。

ところが、客がまるでない。サンダル履きではないものの、普段着のまま。そのへんのオジサン、オバサンが気楽にやってきていて、まるで郊外の巨大パチンコ屋みたいである。

連れには「カジノって、こんなの」と疑問を呈された。ラスベガスやマカオなどの本場カジノを経験していないので、なんとも答えようがなかった。実は、ハイフォン郊外のドーション（ベトナム）で、それらを一通り試みたことはあるのですが…。

それはさておき、セブには観光名所が多い。マゼランクロスは、冒険家のF・マゼランが、一五二一年に上陸してきた際に作った、木製の十字架である。サント・ニーニョ教会や道教の寺院もある。もともとセブは、スペイン統治時代に、首都としての機能を持たされてきたのである。

客であふれるマーケット ウィンドーショッピングで避暑

なんとといっても壮観は、港に面したカルボン・マーケットであった。市場にはマンゴー、バナナ



鶏が生きたまま売られているマーケット

などの果物、そして各種の野菜、南国特有の色鮮やかな魚と肉、スナック菓子やタバコなど嗜好品、日用雑貨、近隣の島々から運ばれてきた特産品までが、雑多にうず高く並んでいた。

感心して、「お客さんが多いですね」と、案内してくれたガイド氏に言ったら、「いや、昔に比べたら」とかぶりを振られた。ごたぶんにもれず、大型ショッピングセンターやスーパーマーケットに、押されているらしい。

アヤラやシューマーケットと、大型施設が二箇



日本人も居住する高級マンション

ションだったりする。まるで、出島暮らしである。確かにダウンタウンには、汚い、臭い、危険の3Kがある。でもね、そこには、活気に満ちた商店もあれば、隣と隣、がくつついた安普請の家々（家というより小屋に近い？失礼）も、建ち並んでいるのですよ。

七千を越す島々の島嶼国 共通言語は英語

健気に動きまわる女性陣に比べ、半ズボンに上半身が裸、腕には入れ墨、低い椅子に座って昼間から一杯きこめしている、およそ働く気が見えない男たちもいて、こちらが外国人だと分かると、「ウエルカム」なんて、声をかけてくる。物怖じしなく寄ってくる可愛い子供らもい

所もある。ブテックや各種専門店にレストランや食堂、映画館やゲームセンターなどに、スーパーマーケットも、併設されている。
客、客、客である。
「来るだけ、見るだけです。買い物など、ほとんどしません」と、ガイド氏は笑っている。家は暑く、クーラーを持っていない。扇風機はあるが、電気代もばかにならない。涼しいショッピングセンターに来て、ウィンドーショッピングをし、お腹が空けばファストフードの店に入る。
セブシテイには、日本料理店がたくさんある。総じて安くておいしい。リタイアした人を中心に、日本人も多数住んでいる。住居は、ガードマンにしっかりと警備された外国人専用マン



フィリピンの絵葉書

る。せつかく外国に来て、それらの人々と全くふれあわないなんて、残念な気がしますかね。

セブは、フィリピン国語（ルソン島中部で話されるタガログ語がベース）と言語体系が異なるセブアノ語が、庶民の言葉である。七千を越える島々で成り立つ島嶼国家だけに、統一言語の発達が遅れてしまったのだ。アメリカ統治時代から、フィリピン訛りの英語が、共通言語の役割を果たしてきている。だから自信を持って、たどたどしくても、英語で話しかけたらよい。小生は恥ずかしながら、そのカトコトも、からつきし駄目ですが：ハングルの看板をたくさん見かけた。韓国から

投資が多く、観光客も多数やってきている。「日韓の違いは？」とガイド氏に水を向けてみると、「日本人は、酒を飲むと寝てしまう。韓国人は、喧嘩を始める」と語っていた。

◇参考図書◇

大塚拓司・寺田勇文編著『現代フィリピンを知るための60章』（明石書店）
立道子著『とりあえず1カ月海外リタイア暮らし』（河出書房新社）

■昭和22年北海道生まれ。46年、中大法卒。雑誌編集者、新聞記者を経て現在、尚美学園大学非常勤講師、ロングステイ財団広報委員、日本旅行作家協会会員。『サンダル履き週末旅行』（竹内書店新社）をはじめとする旅行記のほか、エッセイ『裏方物語』（時評社）がある。

教養テレビ番組

知の回廊

Webから教養テレビ番組を見る!! ダイジェスト版公開中

中央大学「教養番組『知の回廊』」番組ダイジェスト版 2006年度 - Microsoft Internet Explorer

中央大学

教養番組「知の回廊」
番組ダイジェスト版 2006年度

番組紹介

01 「教育現場と法科教育～司法官の視点から～」 講師: 木村 博

02 「Access to Entertainment～著作権と著作権～」 講師: 石川 一也

03 「動化する大学入試制度～高度人材の可能性～」 講師: 斎藤 正次